〈学術的読み物〉

甦る、東洋最古のハイウェー

黄　　暁　芬
人間科学部　人間社会学科　観光文化コース
e-mail:xiaofen@toua-u.ac.jp

道は，人類文明史上における重要な創造物の一つである。

紀元前５世紀，古代ペルシアの「王の道」が開拓され，それは広大な帝国版図を通じて迅速な交通と通信を容易にするための幹線道路であった（ヘロドトス『歴史』第５巻）。紀元前３世紀頃，アッピア街道をはじめ，古代ローマは中央から地方を強力に支配するため，直線的な計画道路を帝国の版図にはりめぐらせた。そして，紀元前３世紀末の中国大陸では，天下統一を果たした秦の始皇帝も帝国領土の全域にわたる大規模な道路網を建設し，都城と北方国境線を結び付ける帝国の南北幹線道路－「直道」が創り出された（司馬遷『史記』秦本紀）。ところで，ローマンロードが石の舗装道路を特徴として広く知られるのに対して，秦直道は，わずかな文献記録以外，道路の実態を探る手掛かりがいっさいなく，2000年の間，幻のままであった。

１．秦直道とは

秦が天下統一を成し遂げてまもなく，咸陽宮と始皇帝陵を代表とする帝国の巨大な記念的建造物の造営に莫大な財を費やした。それに国土の南北を縦貫する幹線道路－直道も創設された。漢の歴史家・司馬遷は，かつて武帝の天下巡幸に随行した際，ここを通って秦直道の壮大さに驚き，その様子を『史記』の伝,記に書き残している。

「三十五年，除道，道九原抵雲陽，塹山堙谷，直通之。」『史記』秦始皇本紀より

（「始皇帝の三十五年（B. C. 212），道を切り拓き，九原郡から雲陽に至り，山を切り通して谷を埋めること，南北真っ直ぐに通す。」）

「始皇帝欲遊天下，…乃使蒙恬通道，自九原抵甘泉，塹山堙谷，千八百里。」『史記』蒙恬列伝より

（「始皇帝は天下巡幸を欲し，…蒙恬を派遣し九原郡から甘泉宮に至り道を切り拓くように命じた。山を切り通して谷をうずめること，千八百里。」）

それによれば，秦直道の創建は大将蒙恬の指揮下，紀元前212年急ピッチに進められた。帝都の儀礼空間である甘泉宮（陝西省淳化県）と，北方国境線の軍事要地にあたる九原郡城（内蒙古包頭市）とを南北直線に結びつけた。難所の多い山岳地帯での作道について，司馬遷は「塹山堙谷，千八百里」，すなわち山を切り通して谷をうずめること千八百里，と明記した。ところが，漢代以後の正史には直道の関連記事が途絶え，道路自体も廃れていった。清代の地方志に「聖人条」という地名がわずかに残るものの，秦直道の真相は，歴史の中にかき消され，2000年以上の歳月が経っても，ずっと深い謎に包まれている。

1980年代前後，歴史地理学，美術史学者による秦直道の探索が始まり，たちまちに注目をあつめた〔史1975，1988・賀1989〕。しかしながら，当時文献の解釈を中心にした論述が多く，経由ルートが幾つか提示されたものの，発掘による実物の検証が欠けている。よって，秦直道の実体を掴めず，議論も推測の域を出なかった。21世紀に入り，国家の大遺址保護プロジェクトの推進とともに，秦直道の発掘調査も本格的に展開し，確たる実物資料が得られ，直道の真相究明に堅実な一歩を踏

み出した。筆者は，2008年以来，科研費補助金による秦直道の日中共同調査に取り組み，遺跡の実地踏査やGPS測量，直道のルート検証および発掘によって検出された遺跡・遺物や人骨資料などの総合的考察を行った。その結果，幻だった秦直道の実像は確実に甦ってきている〔黄暁芬・張2011〕。

2．秦直道の景観と構造

1）立地と景観　漢の司馬遷の記述によれば，秦直道の建設地は，現在の陝西省と内蒙古自治区とのふたつの省区に跨り，その南端は陝西省淳化県甘泉宮から北上し，オルドス砂漠を通して北端の内蒙古包頭九原郡城に至る，南北総長約750kmに達する〈図１・図２〉。

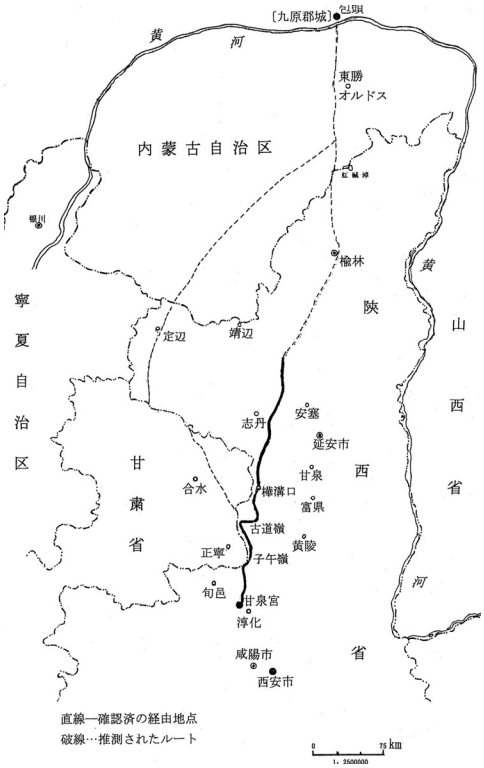


図１　秦直道の位置

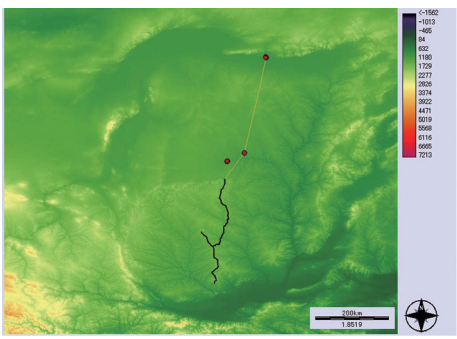


図２　秦直道ルートの実測

・ルート南半　秦直道の南端と見なされる秦漢時代の雲陽甘泉宮は，陝西省淳化県城北にあり，標高600～800mの丘陵台地に宮城垣壁，大型宮殿建築址が残されており，その南側は仲山が聳えており，北側は英烈山連峰を望んでいる〈写真１〉。

写真１

写真２

ここから北へ英烈山を越え，旬邑県石門関，黄陵県彫嶺関を経て子午嶺主峰に上がり，興隆関地点に続き，富県，甘泉，志丹，安塞各県を通して南北方向に延びる。山間部の水土流失や崖の崩れを防ぐため，秦直道は谷間の低地を避け，子午嶺主峰をはじめ標高1,300～1,500m山々の尾根に沿った作道を選ぶ〈写真２〉，最短距離をはかり，南北直線道造りの工夫を重ねる。地形・地勢の変化に対応し道幅は平均30m，最大幅は50mを超える。河や深い谷につき当たった場合，山稜から緩やかなつづら折りの道に辿って登山，下山する。一方，ルート沿線には一定の距離を置いて、帝王高官ら専用の道中宿泊施設として行宮（あんぐ）が造られ、道路の整備・管理する亭障（ていしょう），関所（せきしょ）なども要所ごとにあった。

・ルート北半　陝西省北部の榆林市と内蒙古自

治区の南北を縦断する区域，丘陵台地や草原大地，ゴビ砂漠を通して黄河北岸，陰山南麓にある包頭市に至る。人口の希薄な山岳地帯で作道したルート南半に比べて，北半の草原，砂漠地帯では，長年の風砂や沙塵にさらされて古代遺跡の保存状態が悪く，道路遺構の追跡は難しい。オルドスの丘陵台地あたりに道幅40m前後の古道が見つかり，包頭市に残る麻池古城は，秦直道北端の九原郡城址と推測されている。

2）「塹山（せんさん）」と「堙谷（いんたに）」　秦直道は，山岳地帯に道を切り拓くことが特徴で，地形，地貌の変化に応じて作道工法が適所適宜に選別された。まず，作道の進行方向を塞いだ山稜を掘削して道路を敷設する，文献にいう「塹山」，すなわち山の切り通しである。そこで道路を挟んで山稜が「凹」字形と成した遺跡について，地元には「堙口（やこう）」と呼ばれ，古道の標識的な存在である〈写真３〉。また，ルート沿線に谷間や窪地にあたった場合，地形・地貌に見合わせた人工的構造物＝「堙谷」を築き上げ，その上に平坦の道路を敷設する〈写真４〉。これらは司馬遷が描写された「塹山堙谷」の原風景として見受けられる。

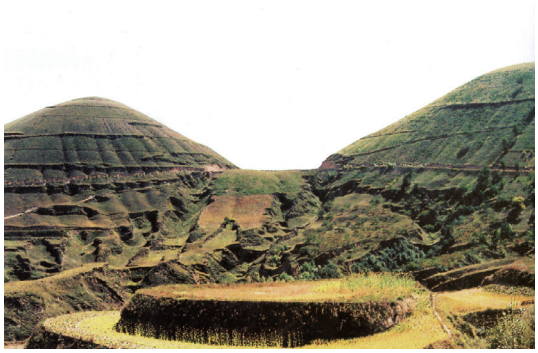
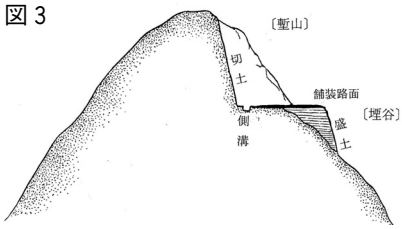


写真３

写真４

2）切土（きりど）／盛土（もりど）の工法〈図３〉　陝西省黄陵，富県，甘泉県古道の発掘を通して秦直道の構造やその作道工法が初めて確認できた。

図３



まず，地山をならして地盤の弱いところを版築土で補強する。そして，山間部地帯で一定の道幅（平均30m前後）を保ち，平坦な大道を開拓するにあたって，片方は尾根の斜面を必要な範囲で掘削し（＝切土），もう片方は谷の斜面やがけ縁に必要な高さまで土を搗き固めて築き上げる（＝盛土），そこに掘削された土を路盤造りに足し，平坦かつ堅固な道路を敷設する〈写真５〉。また，地形状況に応じて盛土の厚さが不均等であり，路盤の盛土は一般に0.5m前後，崖縁や河岸には１～６mに及ぶ〈写真６〉。

写真５

写真６

3）版築土の作道

直道の建材はほぼ土のみで，場合によって砂利を混ぜ込んだところもある。基本的に版築技法を用いて路盤・路面・路肩・側溝を分別に構築する〈写真７〉。構造上の必要に応じて土を搗き固めた度合いや厚みが異なる。路盤の版築土が１層の厚さ20～50㎝前後，路面の舗装土層は約５㎝，粒子の細かい土を１層0.5㎝ほど緻密に搗き締められる。道路構造の耐久性や排水効果を考えて，道路両側ないし片方の路肩の外側に幅約１ｍの側溝を設けるほか，道路の中央にはカマボコ状に隆起させられ，その両側は中央部よりやや低く設け，路面の高低差を利用した自然排水も工夫された。

写真７

３．実地調査とルート検証

１）ルート南半　陝西省中，北部の黄土高原，山岳地帯にあたる

・秦直道南端　淳化県城北の丘陵台地に秦漢時代の甘泉宮遺跡があり，宮城垣壁，城門・宮殿建築址，大型の版築基壇など，畑のなかに残されている。宮城北門近く，道路らしい遺跡が見つかったが，未発掘のため，道路の詳細は不明である。ここから北へ英烈山の麓に至るところ，山水流失の経年変化による大溝が形成され，それによって秦直道遺跡が削られたと，現地案内の淳化県博物館長からの説明を受けた。今後の発掘調査に期待したい。この一帯でGPS測量をして宮城北門地点から大溝沿いに北へ，英烈山越えの古道遺跡まで全長12㎞，南北正方位で一直線に延びる。続いて，英烈山北麓の箭杆梁一帯，潅木の生い茂る地帯で山の切り通し，尾根沿いに切土／盛土などの作道遺構が所々残されている。また，旬邑県の艾蒿湾，大草坪，廟溝および石門林場を経てから抜群の天然要塞である石門関に到達する。周辺には標高1,300～1,500ｍの峰々が聳え立ち，山稜に残る道路遺構は道幅約20ｍ，版築基壇をもつ大型建築址が２ヶ所あり，まわりに秦漢期の宮殿様式と見られる礎石や磚瓦建材が散乱している。道路に付設する格式の高い行宮建築に該当する。秦直道はここから北へ黄陵県に続き，標高1,500ｍの子午嶺主峰に上がる。

・黄陵県南桂花，興隆関　子午嶺主峰の頂上に秦直道が敷設され〈写真８〉，尾根沿いに艾蒿店，五里墩，南桂花地点を経て北の興隆関に延びる。ここで山の切り通しがやや低く，切土／盛土などの作道遺構が随所に見られる。山稜の地形変化に応じて道幅は10～40ｍと不均等である。そして，東西に走る深さ30ｍほどの谷に阻害された南桂花地点の作道は，深さ約30ｍ谷底から土を搗き固めて谷を埋め尽くして、その頂上に道路が敷設された。ここの基盤造りを強化するため，下部構造の斜面に礫石を混ぜ込んだ版築土層が施された。こうした人工的構築物は南北全長214ｍ，谷底の幅50～60ｍ，高さ30～35ｍの頂上に残存する舗装道路の道幅は10～16ｍで〈写真９〉、まるで巨大な堤防構造のようである。これは、司馬遷『史記』に描写された直道「堙谷」の圧巻である。

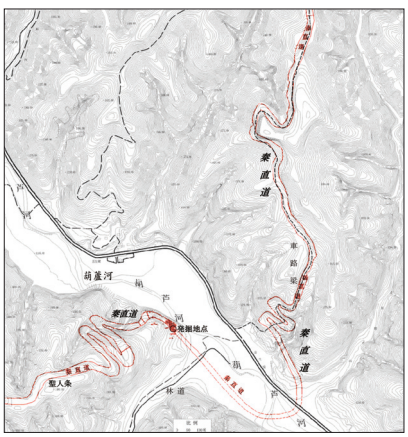
写真８

写真９

続いて，南桂花地点から北へ，古道遺跡の分水嶺である興隆関に至る。元々南北方向の子午嶺主峰がここで枝分かれ，一つは，北西方へ延びる連峰が甘粛省の境域に入り，もう一つは興隆関地点から東へ曲がってゆく。甘粛省境内の子午嶺連峰の山稜には道幅４ｍ前後の古道が残り，これは秦直道の甘粛省ルートを主張する学者の有力な証拠として知られている。しかし，2010年陝西省考古研究所主導の子午嶺古道発掘では，これが唐・宋時代の作道遺構の一部であることが明らかになった。とくに，南桂花遺跡の発掘現場では，この唐・宋古道遺構は秦直道遺構の上層に重なって存在することが確認された〔張2011〕。また，興隆関地点から東へ曲がる山稜沿いに，子午嶺主峰の頂上に見つかった秦直道の遺構と同様に，切土／盛土や，版築土の舗装道路がトレンチ調査で判明した。それに東へ月亮坪，花家坡を経て富県直道へと続く。古来，この東西方向の山稜地帯は「古道嶺」と称され，秦直道の経由地点と見ることができる。とくに，興隆関地点から古道嶺へと曲がる角のトレンチ調査には，道幅60m余り，秦直道全ルートを通して最大幅を誇る。そして，古道嶺頂上の秦直道は三面窯地点で北へ曲がり，富県遺跡に続く。

・富県張家湾郷の樺溝口，車路梁　富県直道は防火門，張家湾郷遺跡を代表に南北全長おおよそ5.3㎞，ルート沿線には山の切り通しや切土・盛土の作道遺跡が数多く残されている。張家湾郷中部山岳地帯に延びる秦直道は東流する葫蘆河に遮断され，山稜から緩やかなつづら折りの道を辿って河谷低地に下山して葫蘆河をわたる。河谷地帯を通過してから再びくねり曲がった道を辿り，山稜へ登ってゆく。〈図４〉河の南北両岸に連綿する山々は，標高1,300～1,500ｍで，山の尾根沿いに延びる道路遺構の幅は30～50ｍを測る。河南岸の大麦桔溝，標高1,500ｍの山稜地帯に「聖人条（皇帝の大道）」と呼ばれる地があり，この地名も清代の地方誌に記録されている。筆者が河谷低地から５時間かかりで「聖人条」へ登ると，道幅50ｍの南北直線道路が尾根線上に横たわっている〈写真10〉。

図４　富県葫蘆河両岸の直道遺跡


秦直道
葫蘆河
秦直道
発掘地点
聖人条
秦直道
車路梁
秦直道
秦直道
秦直道

った山の切り通しなどの作道遺構〈写真11〉が随所に残り，その一部は現代の林道として利用されている。「車路梁」という地名も「聖人条」と同じく，秦直道の存在と深く関わる名残である。ここでトレンチ調査や試掘が行われたことによって，道路構造の詳細を明らかにした。いずれも版築土の作道で，路盤・路面・路肩・側溝を分段に造られ，道幅は平均30m，最大幅50mに達する。道路遺構から秦代の銅鏃，前漢期の五銖銭が見つかり，古道の年代を判読する重要な証拠が得られた。

写真13

写真14

2009年，張家湾郷葫蘆河一帯，青島-蘭州高速道の建設工事に伴う調査では，葫蘆河南の岸辺にある樺溝口遺跡を大規模に発掘し，秦直道の真相に迫る多大な成果が得られた。河南の岸沿いに切土／盛土の作道遺構がよく残り，岸辺の盛土は高さ３～５m，頑丈な防波堤のようである〈写真12〉。道幅は40～50m，版築土の舗装路面には密に重なった轍痕〈写真13〉が検出され，車列がここを頻繁に通ったことがうかがえる。道路の両脇には多量な軒平瓦・軒丸瓦や礎石など秦漢期の磚瓦建材が出土し，路傍建築の存在が判明され，その付近に土坑墓も見つかった〈写真14〉。また，舗装路面からは秦代の銅鏃や「大泉五十」を刻んだ王莽銭など貴重な遺物が検出し，人為的な道路破壊の遺構，そして，道路廃棄後の路面埋葬や人の足跡（前掲写真13）など重要な遺跡現象をも発見した。筆者がこの発掘現場で路面に埋葬された人骨サンプルを採集し，東京大学人類学研究室の協力研究者によって出土人骨の年代分析をしていただいた。このように樺溝口遺跡発掘の現場検証，貨幣の紀年銘や銅鏃，磚瓦の型式編年，および出土人骨の年代測定を通して総合的に考察した結果，秦直道の創設・使用・廃棄の時期幅が推定できた〔黄暁芬・張2011〕。それは秦代に建造し，漢代に受け継がれ，300年間継続利用され，後漢前期に廃棄されたのである。

・甘泉県方家河　富県遺跡から北へ，甘泉県境内の橋鎮郷，方家河，杏樹嘴，楡樹溝，柏樹坪を経て延びてゆく。ルート沿線の山稜に沿って切土・盛土の作道遺構がよく残り，道幅は20～40mである。方家河地点は，東流する洛河につき当たり，河の南北両岸に延びる秦直道は，やがて山稜から緩やかなつづら折りの道を通して下山し，洛河を渡ってから再び曲がりくねった道を辿り山頂へ登ってゆく〈写真15〉。この一帯では険しい岩山の尾根沿いに平坦かつ快適な交通大道を切り拓くことが極めて困難である。地山をならして直接に利用するところがあるが，主に切土／盛土工法で人工的に道路を敷設する，すなわち，多様な工法を用いて尾根の岩盤を掘削したり，谷間やがけ縁側には盛土，場合によって巨大な構造物を築いたりして，適所適宜で道幅30m前後の舗装道路を造ったのである。また，ここ岩盤の切土斜面には稀に見る金属製の鑿痕がはっきりと残っている。

写真15

写真16

写真17

道路の両側には秦漢期の磚瓦建材が散在し，道傍に付属する建築の存在もわかる。今のところ，洛河をわたる橋梁の遺構が見つかっていないが，河北の岸辺に版築技法を用いた大規模な盛土が数ヶ所に残され，そのうち，橋梁と道路を取り付ける施設＝橋台〈写真16〉の存在が看取できる。このように人や車輛の往来交通がこの山間河谷地帯を安全かつ円滑で通過させるため，様々な工夫が施されたのである。さらに，この橋台遺跡から西北800m離れたところ，土で搗き固めた巨大な方形柱状の人工的構造物が残っている。これは，深さ約30mの谷底から版築土で搗き固めた構築物＝「堙谷」であり，尾根線上の路盤をしっかりと支えている〈写真17〉。2000年以上の歳月を経ても，この巨大な「堙谷」の頂部だけは崩れ去ったものの，残された部分の高さが20m以上あり，山稜に敷設された秦直道を支えた姿が今も眺められ，見る者を圧倒する。

・志丹県永寧郷任窰子　甘泉県遺跡から北上し，志丹県永寧郷，安条，楡樹条，新勝条，李条，劉条，交泥条の順に延びる遺跡の全長は約20kmである。この周辺に大道を意味する「条」字の付く地名が多く，かつて古代大道がここを通っていた証である。ルート沿線には山の切り通し，切土／盛土の作道遺構が所々見られ，道幅は約20～30mである。とくに，永寧郷任窰子地点では，大型建築群の版築基壇が直道遺跡の傍によく残されており，南北350m，幅80m，高さ15mである〈写真18〉。その頂上には大小の宮殿建築址を囲んだ垣壁や城門遺跡がよく残り，周辺は大型礎石，陶製の排水管，縄文を施した軒平瓦・軒丸瓦や雲文の瓦当，壁造り用の菱形文空心磚，回字形の文様を施した方磚などが散在している。2008年夏，筆者の現地調査時，地元の郷道開発で，この大型基壇の東側一部を掘削した作業現場に立ち会い，この巨大な版築基壇の断面構造を観察することができた。ブロック単位で土を搗き固めた基壇下部の版築土層に対して，上部構造の版築土は，層ごとに８～12cmで搗き締めており，レンガや石材並みの頑丈さを持ち合わせている。そこで横穴を掘って現代の住家（＝窯洞）や貯蔵庫，豚小屋として転用されており，人々は2000年前の高度な土木技術を今でも享受している〈写真19〉。このように大型建築基壇の規模，秦漢期の宮殿様式の磚瓦建材揃いなどの特徴からみると，任窰子大型建築群は，直道に付設する格式の高い行宮施設に該当すると考えられる。

写真18

写真19

・安塞県化子坪郷紅花園遺跡　志丹県北部の杏河鎮を通って安塞県に入る，ここで王窰郷，化子坪郷遺跡を代表に，山の切通しや切土・盛土の作道遺構が見られ，道幅10～30mが一般的で，最大幅は約50mに達する。化子坪郷紅花園村にある直道東側に，建築面積約10万㎡の大型建築群が残されている〈写真20〉。現存する版築基壇の高さ約10m，その頂上には礎石や空心磚，陶製の大型排水管など，秦漢期の宮殿様式を表す磚瓦建材が散乱しており，雲文を施した瓦当や「宮」「工」「水」の文字を刻んだ宮殿様式の軒平瓦，軒丸瓦が特徴的である。2011年夏，筆者が現地調査した際，珍しい虺龍文を施した瓦当の残片が地表から採集された〈写真21〉。この特殊な虺龍文の瓦当は，秦の都咸陽宮，始皇帝陵の壮大な記念的建造物しか見られないもので、黄土高原の山稜古道に付設した大型建築址から都の宮殿遺跡と同じ様式の装飾磚瓦が発見されたことは，安塞県紅花園建築群の格式が高く，ルート沿線に建設された秦直道行宮の一つであることを物語る。

写真20

写真21

2）ルート北半：陝西省北部榆林地区から内蒙古自治区包頭市に至る

1990年代以来，陝西省榆林市文物考古研究所，内蒙古自治区の考古学者によるルート北半の実地調査が続き，秦直道らしい地点が複数提示されたが，いずれも推測の域を出ない。第１図では実線と破線を用いてこれを区別している。

・陝西省榆林地区　榆林市文物考古研究所の調査資料によれば，榆林地区靖辺県の小河郷後鄭石湾村で，ルート北半に入る代表的道路遺跡が見つかった。これは安塞県北境の王家湾郷遺跡から北へ延びてきたものらしい。版築土の作道遺跡が残り，道幅は約６～20mである。また，榆林市北西の馬合郷達石村東にある河口ダム西には，古道らしき版築土層が見つかり，道幅は20m前後，最大幅約40mに達する，という。しかし，これら古道遺跡は，いずれも未発掘で，今のところ，道路遺構の詳細は確認されていない。ここから北上し，内蒙古自治区オルドス市遺跡に続く。

写真22

・内蒙古自治区オルドス　現オルドス市西31㎞の東勝区柴登郷城梁村に古城址が見つかった。遺跡からは雲文，幾何学文を施した秦漢期の磚瓦残片が散在しており，漢代城址の一部と推測された。この周辺はオルドスの背骨と呼ばれ，標高1,500mの丘陵高地が広がっている。1980年代頃，歴史考古学者らが城梁村古城址の現地調査では，ここにも山の切り通し＝「埡口」が残り，秦直道遺跡として指摘されたか〔賀清海・王1989〕。その後，東勝区城梁村古城址の再調査が行われ，方形古城址の規模や年代推考を確認したうえ，古城址の西へ100mほど離れる小高い丘陵台地には，切土の作道遺構らしい地点が見つかっており，道幅は約50mである〈写真22〉。現地の考古学者の案内によれば，古城址を中心に南北方向の台地を眺める

と，一定の距離を置いて「堙口」が断続的に残っており，所々，切土の作道遺構も見られるという。ほかに，オルドス市東勝区の漫頼郷二頃半村南の山崗台地にも山の切り通しや切土工法の痕跡も見つかり，道幅22m前後，路面には赤砂岩土を混ぜ込んだ舗装土層があるらしい〔国家文2003〕。これらオルドス東勝区一帯の古道遺跡は，内蒙古自治区秦直道の代表例として知られている。ところが，内蒙古秦直道遺跡の発掘事例がなく，現場で検証された実物資料も乏しいため，この地域における秦直道の真相究明は，まだ時間が必要である。近年，中国の旅行観光業が発達し，オルドス企業家の投資より東勝区城梁村遺跡の付近で「秦直道博物館」を建設，開館し，近くに秦直道の観光施設も開発されている。

・直道北端ー包頭市　『史記』の記述によれば，直道の北端地点は，秦の北方国境地帯の九原郡城にあたる。現在の包頭市麻城鎮に国の史跡と指定された麻池古城が残り，北側は，陰山連峰が聳え立ち，南側は黄河が流れている。麻池古城はこのような天然の防御線に囲まれているのである。古城址の保存状態は良好で，方形の北城と南城に分かれる。北城は東西の長さ720m，南北幅690m，北門，南門そして城門には幅15mの道路が通る。城内中央あたりに大型宮殿建築基壇遺跡が残り，版築城壁に囲まれている。また，北城東南角に付け足した形で増築された南城は南北600m，東西400m。北城から出土した遺物は戦国～秦漢期に帰属するものが多く，南城の出土遺物は漢代の磚瓦建材に集中する。したがって，北城の建造時期が南城よりやや古く，秦の九原郡城にあたると推測される。ただし，麻池古城は，現代の都市建築や市民住宅と重なって存在し，周辺遺跡の調査，秦直道の実体は，いまだに確認されていない。今後，秦の九原郡城址，並びに道路遺構の発掘成果が期待されている。

秦直道は、始皇帝時代の国家プロジェクトとして創設され，帝都の儀礼空間・甘泉宮と北方国境線にある九原郡城とを結びつけた幹線道路で，南北距離全長750㎞である〈前掲第２図〉。基本的に版築土の作道で路盤・路面・路肩・側溝からなり，道幅平均30m，最大幅60mを誇る。山岳高地の尾根沿いに切土／盛土工法を用いて平坦な道路を敷設し，大規模な車列を最短距離に進ませるように地形・地勢の許す限り南北まっすぐに造った。ルート沿線には一定の間隔をもって帝王らの巡幸専用の行宮や道路整備・管理施設の亭障，関所・駅舎も道傍に建設された。こうした東洋世界のハイウェーは，2200年ほど前，巨大な権力組織と高度な土木技術によって短期間に築き上げたもので，漢代にもそれが受け継がれた。時の皇帝らが天下巡幸の際，御輿や官僚随従の車列はここを往来し，北方有事時，出征部隊の車騎や物資運輸もこの幹線道を走行し，おおよそ300年余り利用され続けた。やがて，この壮大なハイウェーは，後漢前期頃人為的破壊によってその終焉を迎えたのである。

【参考文献】

・黄暁芬・張在明2011「秦直道の研究」『日本考古学』第31号，2011.5
・賀清海・王開1989「毛烏素砂漠中秦漢‘直道’遺跡探尋」『成都大学学報』1989年１期
・国家文物局編2003『中国文物地図集・内蒙古自治区分冊』西安市地図出版社
・史念海1975「秦始皇直道遺跡的探索」『文物』1975年10期
・史念海1988「直道和甘泉宮遺跡質疑」『中国歴史地理論叢』第３輯
・張在明2011「２＋２＝４：秦直道発現道路四畳層与東西線之争」『中国文物報』2011.8.12

〔挿図一覧〕

第１図　秦直道の位置図
第２図　秦直道ルートの実測図
第３図　秦直道の構築法：切土と盛土
第４図　富県葫蘆河両岸の直道遺跡

〔写真一覧〕

1. 秦直道南端：甘泉宮遺跡
2. 尾根線上の作道
3. 秦直道の「塹山」
4. 秦直道の「堙谷」
5. 直道切土・路面・堙口

6. 秦直道の盛土
7. 直道の発掘：路盤と側溝
8. 子午嶺頂上の秦直道
9. 堤防式大「堙谷」
10. 富県「聖人条」
11. 富県車路梁の切土・盛土・埡口
12. 葫蘆河岸辺の直道盛土
13. 直道路面の車轍と人の足跡
14. 道傍建築と路面の土坑墓
15. 甘泉直道：河を渡る盤山道
16. 方家河直道の橋台
17. 方家河直道の「塹山堙谷」
18. 志丹直道の行宮基壇
19. 行宮の版築基壇上層
20. 安塞直道の行宮基壇
21. 行宮遺物：磚瓦,礎石
22. オルドスの秦直道・埡口